

4 測定方法

加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC社製)を使用し、¹⁴Cの計数、¹³C濃度(¹³C/¹²C)、¹⁴C濃度(¹⁴C/¹²C)の測定を行う。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HO_xII)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5 算出方法

- (1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の¹³C 濃度(¹³C/¹²C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表した値である(表4)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) ¹⁴C年代(Libby Age : yrBP)は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0yrBP)として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach 1977)。¹⁴C年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表4に、補正していない値を参考値として表5に示した。¹⁴C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、¹⁴C年代の誤差($\pm 1\sigma$)は、試料の¹⁴C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
- (3) pMC (percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の¹⁴C濃度の割合である。pMCが小さい(¹⁴Cが少ない)ほど古い年代を示し、pMCが100以上(¹⁴Cの量が標準現代炭素と同等以上)の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表4に、補正していない値を参考値として表5に示した。
- (4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の¹⁴C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の¹⁴C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、¹⁴C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差($1\sigma = 68.2\%$)あるいは2標準偏差($2\sigma = 95.4\%$)で表示される。グラフの縦軸が¹⁴C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない¹⁴C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal09データベース(Reimer et al. 2009)を用い、OxCalv4.1較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表5に示した。暦年較正年代は、¹⁴C年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」)という単位で表される。

6 測定結果

SK13埋土最下層出土木炭No.1の¹⁴C年代は $230 \pm 20\text{yrBP}$ 、暦年較正年代は 1σ で1650 ~ 1794cal ADの間に2つの範囲、 2σ で1642 ~ 1954cal ADの間に3つの範囲で示される。

落とし穴出土炭化物の¹⁴C年代は、SK2底面ピット埋土のNo.2が $3380 \pm 30\text{yrBP}$ 、SK3底面ピット埋土のNo.3が $4850 \pm 30\text{yrBP}$ である。暦年較正年代(1σ)は、No.2が1730 ~ 1633cal BCの間に2つの範囲、No.3が3660 ~ 3635cal BCの範囲で示され、No.2が縄文時代後期中葉頃、No.3が前期後葉頃に相当する。

表4 AMS試料一覧(2)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)		$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり			
							Libby Age (yrBP)		pMC (%)	
IAAA-112686	No.1	SK13 埋土最下層	木炭	AAA	-27.24	± 0.44	230	± 20	97.13	± 0.26
IAAA-112687	No.2	SK2 底面ピット埋土	炭化物	AAA	-25.35	± 0.52	3,380	± 30	65.67	± 0.22
IAAA-112688	No.3	SK3 底面ピット埋土	炭化物	AaA	-27.97	± 0.32	4,850	± 30	54.66	± 0.17

[#4903]

表5 AMS試料一覧(3)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし			$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり			暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	±	20	pMC (%)	±	0.24			
IAAA-112686	270	±	20	96.68	±	0.24	233 ± 21	1650calAD - 1665calAD (44.9%) 1785calAD - 1794calAD (23.3%)	1642calAD - 1670calAD (54.2%) 1778calAD - 1800calAD (34.6%) 1942calAD - 1954calAD (6.6%)
IAAA-112687	3,380	±	30	65.62	±	0.21	3,378 ± 26	1730calBC - 1720calBC (8.4%) 1692calBC - 1633calBC (59.8%)	1742calBC - 1616calBC (95.4%)
IAAA-112688	4,900	±	30	54.32	±	0.17	4,852 ± 25	3660calBC - 3635calBC (68.2%)	3696calBC - 3632calBC (87.3%) 3556calBC - 3538calBC (8.1%)

[参考値]

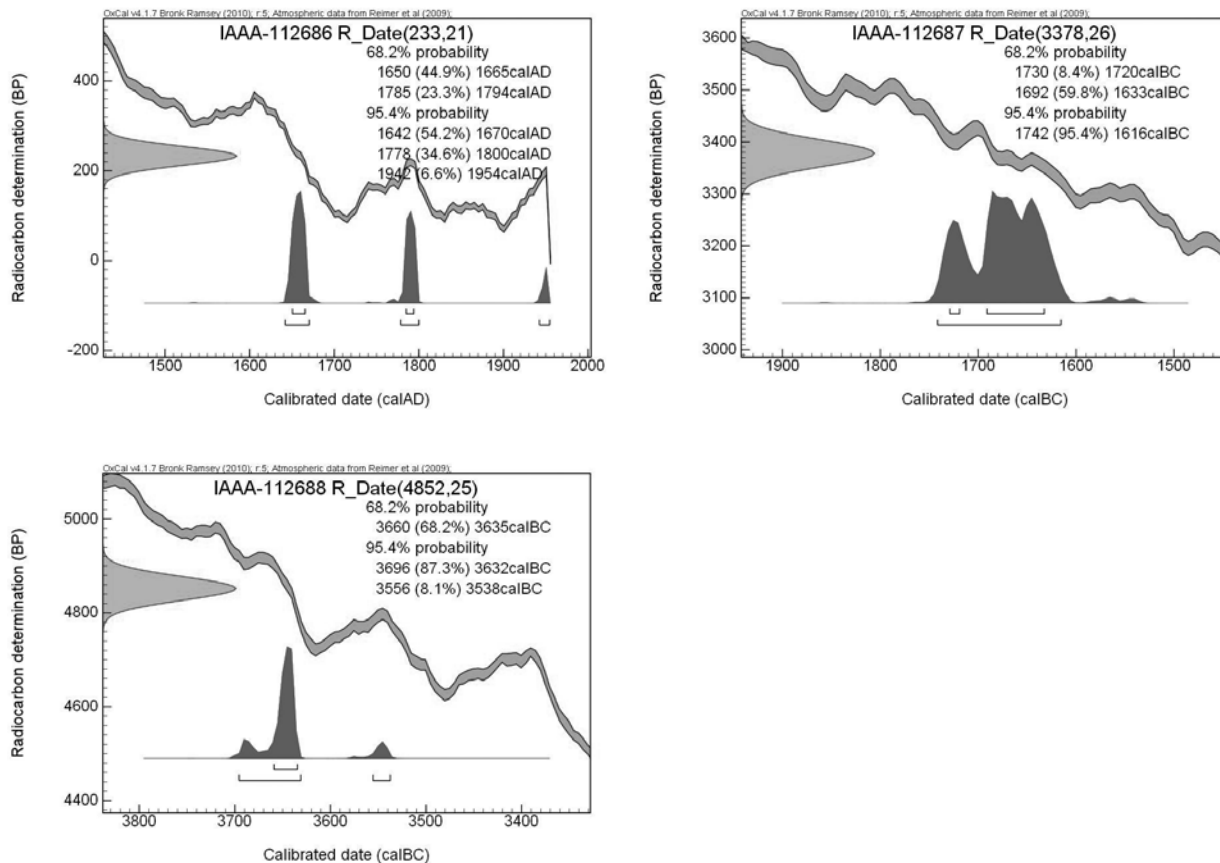
試料の炭素含有率はすべて60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

【参考文献】

Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19(3), 355-363

Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360

Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 51(4), 1111-1150



第68図 暦年較正年代グラフ



写真57 測定対象試料 (No. 1)

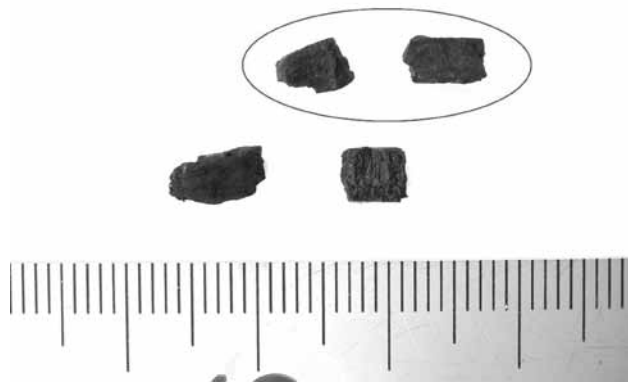


写真58 測定対象試料 (No. 2)

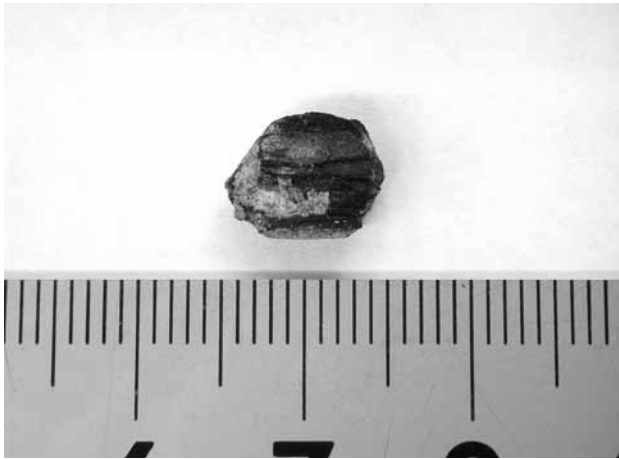


写真59 測定対象試料 (No. 3 : 8×6×5mm 1個)



写真60 測定対象試料 (No. 3 : 6×4×3mm以下15個)

第5節 石井垣上河原遺跡の総括

1 調査成果のまとめ

石井垣上河原遺跡の調査では、古墳時代前期初頭の墳墓4基をはじめとし、縄文時代、弥生時代に帰属する遺構を確認した。墳墓群の詳細については次項に譲り、本項ではそれ以外の調査成果を時代ごとに概観していくこととしたい。

縄文時代

落とし穴を4基検出したほか、遺構外ながら縄文時代早期後葉から末葉に比定される土器、黒曜石製石器等が出土した。

落とし穴の平面形は、楕円形と円形がある。前者は底面ピットを有し、後者には底面ピットは無い。底面ピットには、径が大きく杭支持と想定される小礫を裏込めに施すもの、径が小さく小礫を伴わないものがある。なお、楕円形のSK3と円形のSK4は重複するが、先後関係の把握には至らなかった。

上記特徴を持つ落とし穴は、旧名和町・中山町域における近年の調査において多数検出されており、本調査検出の落とし穴もその範疇に属するものである。倉谷西中田遺跡におけるSK64・65や下市築地ノ峯東通第3遺跡のSK2・3では、落とし穴の重複が確認され、いずれも底面ピットの無いものが底面ピットを有するものに先行する。ただ、底面ピットの有無と土坑の平面形態(円形、楕円形・長方形)との相関については、今後の調査例のさらなる蓄積が必要と考える。また、近年の調査では、埋土最下層及び底面ピット埋土を水洗、抽出した炭化物を試料とし、放射性炭素年代測定を実施しており、徐々に結果の蓄積が進んでいる。その結果(補正年代)を概観すると、底面ピットを持たないタイプでは、小竹上鷹ノ尾遺跡の土坑4が中期後葉、土坑27が早期末～前期初頭、殿河内定屋ノ前遺跡のSK40が早期～前期、下市前築地遺跡のSK3が中期前半、下市築地ノ峯東通第3遺跡のSK2が前期中葉、底面ピットを有するタイプでは、小竹上鷹ノ尾遺跡の土坑5が後期中葉、殿河内定屋ノ前遺跡のSK26が晩期、下市築地ノ峯東通第3遺跡のSK5・15が中期後葉という結果を得ている。時期幅は広いが、現状では底面ピットを持つタイプが持たないタイプより後出する傾向が強く、先述の重複関係を概ね追認している。本調査における分析対象は、いずれも平面形が楕円形で底面ピットを持つタイプだが、SK2が後期中葉、SK3が前期後葉と時期的に大きな開きが出た。このような分析手法の難しさを垣間見る結果となったが、今少し分析成果の蓄積を待ち、評価を行う必要があるだろう。

縄文土器は散発的に出土するが、そのほとんどが胎土に繊維を混入し早期後葉から末葉に比定される。また、黒曜石製石器も少数出土し、残滓類を含むことから若干の石器製作が窺える。現状で明確な遺構は認められないが、当地及び近隣で人的な活動が当該期にあったことを示唆している。

弥生時代

調査地北側のSK5及びその近辺で、後期後葉の土器が出土した。当初、SK5は平面形や規模から竪穴住居跡の可能性を考えたが、底面において周壁溝やピットが認められないことから性格不明の土坑とした。墳墓群に先立つ時期でありその様相は注目されるが、現状では単発的で判然としない。

古墳時代以降

古墳時代前期初頭の墳墓4基を検出し、出土土器数は本調査全体で卓越している。前後する時期の帰属が明確な遺構・遺物は先述のSK5以外は無。古代以降に帰属する遺物はごく少数にとどまり、近世以降、畑地や植林地としての利用が窺えるまでは人的活動の反映は確認されていない。

2 墳墓群の評価(第69～75図、表6・7)

石井垣上河原遺跡で検出された墳墓4基は、甲川流域においては初めての古墳時代前期の調査例となり、この地域の古墳成立期における様相を知るうえで様々な知見をもたらしたと言える。本項では、調査成果を項目別に再整理するとともに、周辺地域^(註1)における弥生時代後期、古墳時代前期を中心とした墳墓との比較についても随時行い、本墳墓群の評価について検討を行いたい。

(1) 出土土器の概要、墳墓群の帰属時期

本調査において、墳墓に伴って出土した遺物のほとんどは土器である。ここでは、土器の出土状況や形態的な特徴などを今一度概観し、墳墓群の帰属時期について検討する。

出土状況 本調査における主な出土土器の分布を第69図に示した。墳丘上の葬送儀礼に伴う土器集積等は確認されず、多くが区画溝埋土からの出土である。ただ、区画溝内において、崩落した貼石下で検出される個体が一定数見られ、墳丘上にあったものが区画溝へ転落した可能性が高い。一方、墳丘上での検出数は少なく破片資料に限られ、墳丘の遺存状況の悪さを反映している。また、埋葬施設内において土器片を少数確認したが、いずれも流入と考えられ、明確に伴うものは皆無であった。

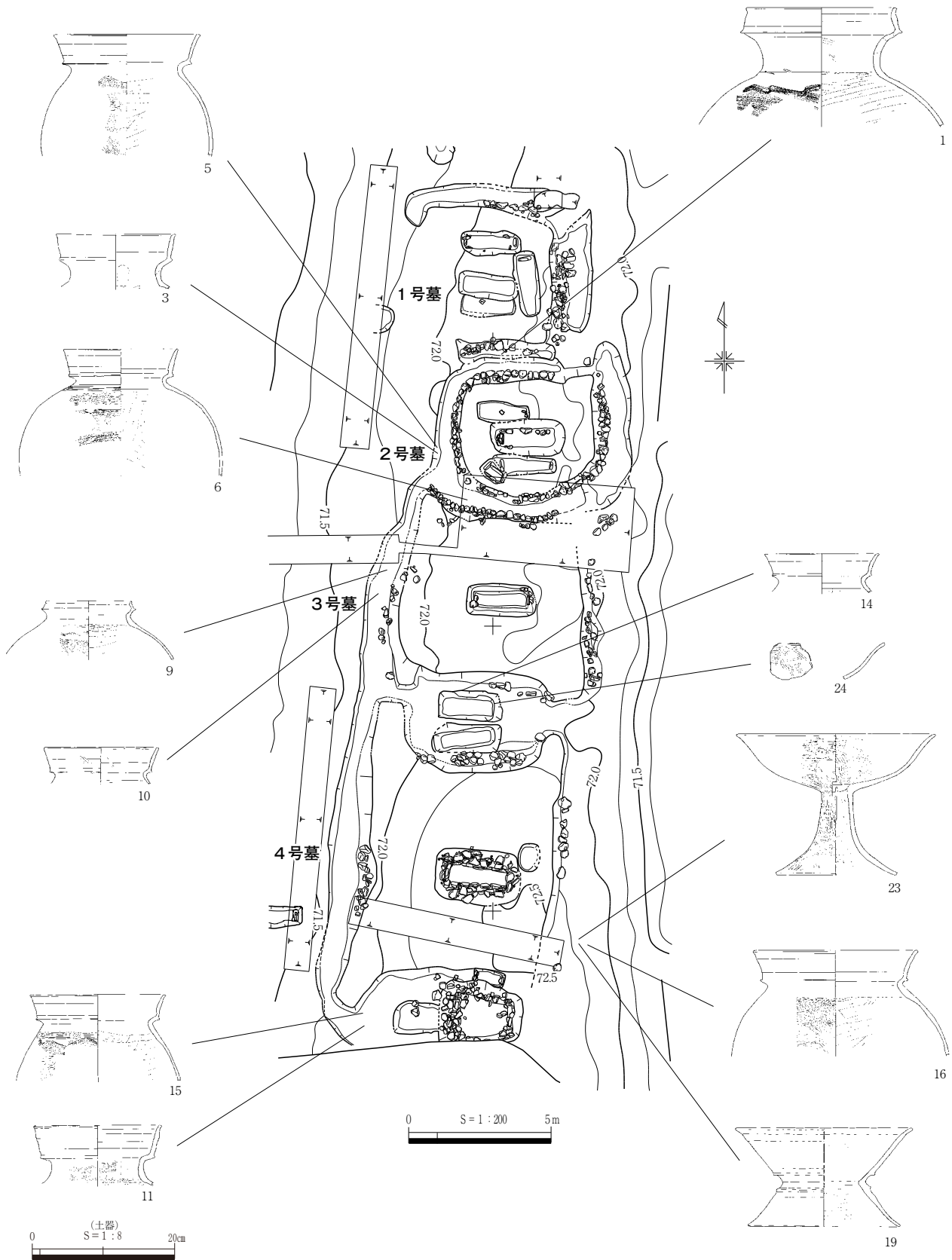
なお、本章第2節で述べたように、隣り合う墳墓の区画溝は重複し、当該箇所出土した遺物はいずれの墳墓に伴うものか厳密に判断できず、資料的な限界を有している。ただ、全般的に見て土器の特徴に大きな差異が無いため、墳墓毎ではなく墳墓群全体として検討を行うこととする。

出土土器の特徴 器種別では壺、甕が主体で、鼓形器台、高坏、低脚坏が少数ながら出土した。各器種の概要を以下に列挙する。壺、甕のほとんどは外反する複合口縁を呈するもので、口唇部には平坦面を有する。口縁下端部の突出は概してシャープである。壺は内傾する複合口縁をもつものも併存する。高坏は坏部が緩やかに立ち上がり、口縁部で外反するタイプ、鼓形器台は筒部径が大きく、屈曲する受部・脚部間の距離が小さいものである。これらの特徴に器壁の厚みといった要素を勘案し、既往の編年案(牧本1999、渡邊2009、河合2009)と照合すると、古墳時代前期初頭(天神川編年I期、渡邊編年IVb期、河合編年VII-0期)に相当すると考える。

器種構成からは、布留系甕、小型器台など畿内地域に系譜のある器種の出土が無く、在地器種の鼓形器台や高坏に見受けられる、ヘラ磨きの多用や透かしを施すなど後出的とされる要素が認められないことから、古墳時代前期前葉(天神川編年II期、渡邊編年V期)に下る蓋然性は低いと評価できる。ただ、1号墓区画溝南辺出土の壺(1)は、器壁の厚みが他の土器群と比較して若干厚く、胎土の色調が橙色系を呈し、淡黄白色系が多数を占めるなか異質であり、前期前葉に下る可能性を持つ。区画溝の切り合いによる先後関係では、最も後出するのは1号墓であり、先の所見と矛盾しない。以上をまとめると、1号墓は古墳時代前期前葉まで継続した可能性があるが、全般的には古墳時代前期初頭において比較的短期間に連続して造墓されたと評価できる。

(2) 墳丘

溝により区画された墳丘の平面形は、方形と四隅突出型である。墳丘規模は一辺5～8m程度であり、弥生時代の同様な墳丘形態をとる墳墓と比較すると、小型^(註2)に該当する(第70図)。墳丘の長軸、短軸は明瞭ではなく、各辺が近似した数値を示す。3・4号墓についても突出部を除くと傾向は同様となる。造墓活動は、四隅突出型を呈する3号墓を皮切りに、南北に隣り合う2号墓(方形)・4号墓(四隅突出型)が続く。既述のとおり出土土器の特徴には明瞭な差が無く、2号墓と4号墓の先後関係は判然としないが、2号墓に続く1号墓の墳形が方形であることから、採用する墳形が四隅突出型から



第69図 主な出土土器の分布

方形へ変化する過程を示している可能性はある。隣り合う墳墓における区画溝重複箇所の見解では、後出する墳墓の区画溝掘方が先行する墳墓の墳丘を破壊することは無く、むしろ明確な意識のもと構築されている。その顕著な例が、3号墓を臨む2号墓南辺のあり方である。当該箇所は、突出部に向

表6 石井垣上河原遺跡墳墓一覧

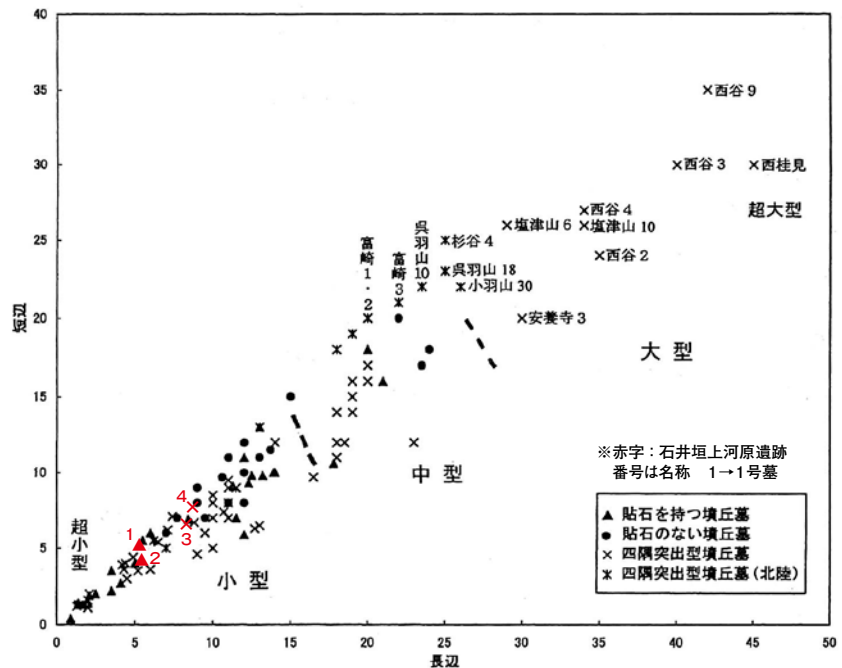
名称	墳丘		埋葬施設					
	平面形態	規模(長辺×短辺:m)	名称	棺種	墓壙規模(長軸×短軸×深さ:m)	中心埋葬	備考	
1号墓	方形	(一辺) 5.1 ※区画溝は西側巡らず 詳細不明	1	木棺	2.12 × 0.89 × 0.65	○	埋葬施設3を切る	
			2	木棺	2.12 × 0.88 × 0.37			
			3	土壙?	1.92 × (0.64) × 0.19			
			4	木棺	2.31 × 0.89 × 0.36			
2号墓	方形	5.4 × 4.6	1	土壙?	1.84 × 0.78 × 0.18		木棺痕跡の有無不明	
			2	木棺	2.27 × 0.76 × 0.31			
			3	木棺	2.62 × 1.30 × 0.69			
			4	石棺	0.96 × (0.65) × 0.26 (棺内:長軸×短軸) 0.61 × 0.22			
3号墓	四隅突出型	7.5 × 6.0 (突出部を含めず)	-	木棺	2.46 × 1.13 × 0.54	○		
4号墓	四隅突出型	8.0 × 7.2 (突出部を含めず)	1	石棺	2.98 × 1.94 × 0.51 (棺内:長軸×短軸) 2.03 × 0.62	○		
			2	土壙	2.45 × 1.05 × 0.41			区画溝内
			3	土壙	2.24 × 1.05 × 0.34			区画溝内
			4	木棺	1.10 × 0.6 × 0.27			区画溝内

け緩やかな曲線を呈する3号墓北辺のラインをなぞるように並行し、2号墓は墳形が方形基調ながら下膨れ様の特異な形態をとる。このことから、相互の墳墓被葬者の緊密な関係が窺える。また、3号墓に面する4号墓区画溝北辺の埋土中には、3号墓由来とみられる貼石が多数転落しており(第44図)、3号墓築造後さほど間を置かずに4号墓が構築されたことを物語っている。

3号墓・4号墓における墳丘隅の突出部は、それぞれ3箇所

で遺存が確認された。突出部の長さ、基部幅にはばらつきがあり、先端形状などの平面形態も統一感に乏しい(註3)。ただ、本調査例の場合は、遺存状態の悪さに起因する可能性もある。3号墓の北西隅は突出部の先端まで墳裾の貼石が確認でき、突出部の形態が比較的明瞭で、短く三角形状に突出する状況が認められる。突出部における配石構造については、当該箇所を見る限り他の箇所と比較して差は無い。

方形を呈する1号墓では、西側を除く各辺で区画溝を確認したが、南東・北東隅では溝が深さを減じ、陸橋状を呈する。四隅突出型墳丘墓における突出部は、墓上への通路として発達し、それが最終的には形式化、形骸化へ向かうことが指摘されている(渡邊2003)。先述のように本墳墓群は、四隅突出型から方形への墳形変化が為された可能性があることから、1号墓における陸橋状の箇所は突出部の名残とも理解できよう。また、2号墓の北東隅も区画溝が深さを減じ、貼石も配されていないことから、同様な可能性を持つと考える。



第70図 弥生時代墳丘墓における墳丘規模の分布 (渡邊2007を一部改変)

盛土は、明瞭に遺存していなかった。貼石の転落状況から勘案すると墳丘は上半を失っており、高さにして20～30cm程度の流失と考えられ、いずれにしても低墳丘に属する。区画溝埋土から盛土の存在を示唆する箇所はほとんど無く、盛土は施されていたとしても、局所的と想定される。

(3) 区画溝

上記のように盛土は顕著でなく、四周に区画溝を掘削することにより墳丘を強調する手法を採ったとみられるが、各辺で溝の掘削度合いに差が確認できる。これは1号墓・2号墓で比較的顕著であり、東辺が深く掘削される傾向にある。東辺は比較的良好な溝の遺存状況を反映し、墳丘斜面に施された貼石も残りが良い。配される石材の法量も他辺に比べ若干大きく、造墓に際して東側、すなわち甲川側への意識が窺え、墳墓群の正面観を示すものと考ええる。

(4) 配石構造

遺存状況が不良で、配石の詳細が不明な箇所があるが、貼石は1～4号墓全てに施される。立石列、敷石列といった列石は施されない。石材は亜円礫、円礫を主体とする。東隣を北流する甲川河岸と石材の様相が一致し、直近の河原からの搬入が窺える。原則として白灰色を呈する緻密な安山岩を選択して用いており、視覚的な意識も想定できる。

設置は、石材の平滑で広い面を外側へ向け、墳丘斜面に沿い40～60度程度の角度で行う。各石の長軸は縦向きが主体だが横向きと混在しており、石組における各段の高さを揃える意識は窺える。遺存する貼石を見る限り、他の設置手法は認められずバリエーションに乏しい。本墳墓群の貼石は、周辺地域において、弥生時代中期の方形貼石墓に端を発し、後期において四隅突出型墳丘墓等に受け継がれた伝統的手法に沿うものと評価できる^(註4)。

(5) 埋葬施設

各墳墓において1～4基を確認した。4号墓は溝内埋葬が認められる(3基)。棺形態は木棺を主体とするが、2号墓、4号墓では石棺が採用される(表6)。

埋葬配置形態 区画内(墳丘)における埋葬施設数は、四隅突出型の3号墓・4号墓では1基、方形の1号墓・2号墓では4基と、墳形により差異が明瞭で興味深い結果となった。しかしながら、本墳墓群が帰属する古墳時代前期初頭において、この事例が一定の傾向を示すかどうかについては、検討材料が不足しており、現状は調査例の増加を待つ段階にあると考える。四隅突出型を呈する墳墓において、本調査例に比較的時期に近い、弥生時代後期後葉～終末期(庄内式併行期)帰属の事例を見ると(表7)、1～4基程度が多いが、矢谷MD1号墓(広島県三次市)、糸谷1号墓(鳥取市)のように10基を越えるものもあり、今のところ特定の傾向は見出し難い。今後調査例が増加し、地域性などを加味した検討が可能となった際に再検討の余地があろう。周辺地域の墳墓(弥生時代、古墳時代帰属)における埋葬施設の数、配置形態、墳形(主に長幅比)の関係性について精緻な検討を行った池淵俊一氏の論考(池淵2006・2007)によれば、弥生時代後期後葉にピークを迎える区画内の埋葬施設数は、弥生時代終末期以降、古墳時代前期を通じ、単数埋葬の事例増加もあり減少傾向だが、古墳時代前期でも2基以上の複数埋葬は半数近くを占めるといふ。また、4基以上の多数埋葬も10%強あり、本墳墓群における様相はその検討結果から逸脱するものではない(第71図)。

本墳墓群における埋葬施設の主軸は、多くが尾根筋に対して直交し、概ね東西方向を指向する。埋葬施設の配置について、区画内に複数の埋葬施設が検出された1号墓・2号墓について概観する。各墓壙は基本的に近接して並列し、各々の掘方を僅かに接する傾向が強い。中心埋葬は、区画内のほぼ

中央に位置し、墓壙規模から特定は可能だが、他埋葬に対し卓越するまでには至らず、一回り大きい程度である。特に、1号墓の中心埋葬である埋葬施設1は、他埋葬と比較して、墓壙の深さは倍近くあるが、平面規模について差はほとんど無い。区画内単独埋葬である3号墓、4号墓についても、墓壙規模の比較において1号墓・2号墓の中心埋葬との差は顕著ではない。ただ、4号墓は墳墓群の中で唯一溝内埋葬(3基)を擁し、中心埋葬の石棺は、貼石と同じ石材を丁寧に組み合わせ、棺の外側にも同様な石材や白砂(川砂)、礫石を施し視覚的効果への配慮も認められるなど、木棺直葬を原則とする他墳墓例に対する若干の優位性は窺える。

1号墓の埋葬施設4、2号墓の埋葬施設4は、埋葬配置の中で異なる主軸方位を示し、埋葬計画における付加的な要素が看取される(第69図)。ただ、1号墓の埋葬施設4は、主軸が他埋葬に対し直交し、墳丘主軸との整合性は確保している。成員としての関係性の強さを示唆するもので、区画内の空きスペースの問題と言える。一方、小型の石棺を擁し、未成人埋葬が想定される2号墓埋葬施設4の配置からは、空地利用によるもの以上に、特定の被葬者(埋葬施設2)に対する強い従属性が窺える。

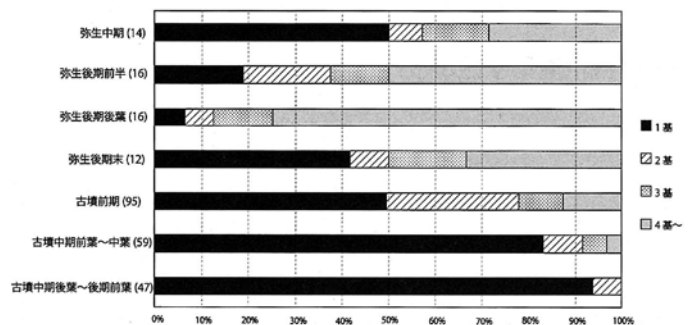
以上、本墳墓群における埋葬配置形態の特徴をまとめると、中心埋葬が明確化しながらも卓越化には至らず、弥生時代後期後葉にピークを持つ未成人埋葬を含む多葬傾向が認められ、弥生時代墓制の諸特徴を維持するものと評価できる。

木 棺 墓壙埋土の土層断面において木棺痕跡が確認され、本墳墓群においては木棺が主体的に用いられていることが判明した。墓壙底面には、小口穴が認められないことから、墓壙底面に敷いた底板上において棺材を組み合わせ、固定する型式(Ⅱ型)が想定される(福永1985)。墓壙内には礫がしばしば検出され、配置、土層堆積による所見から棺材支持のためと想定する。多くが墓壙底面付近に設置され、小口側に手厚く施される傾向を示す。小口側においては小振りな礫を配するもの、大振りな板状の一石を立てる、またはその裏に小礫を配するものがあり(第72図)、後者は小口板を兼ねた可能性もある。鳥取市本高18・19号墳の中心埋葬は木棺が想定されているが、本墳墓例と同様に小口側に板石を立てる。報告では石棺を意識した棺形態と位置付けている(大川2012)。後述するが本墳墓例も初期の箱式石棺が採用されていることから、同様な可能性は考えられよう。今後の検討課題としたい。

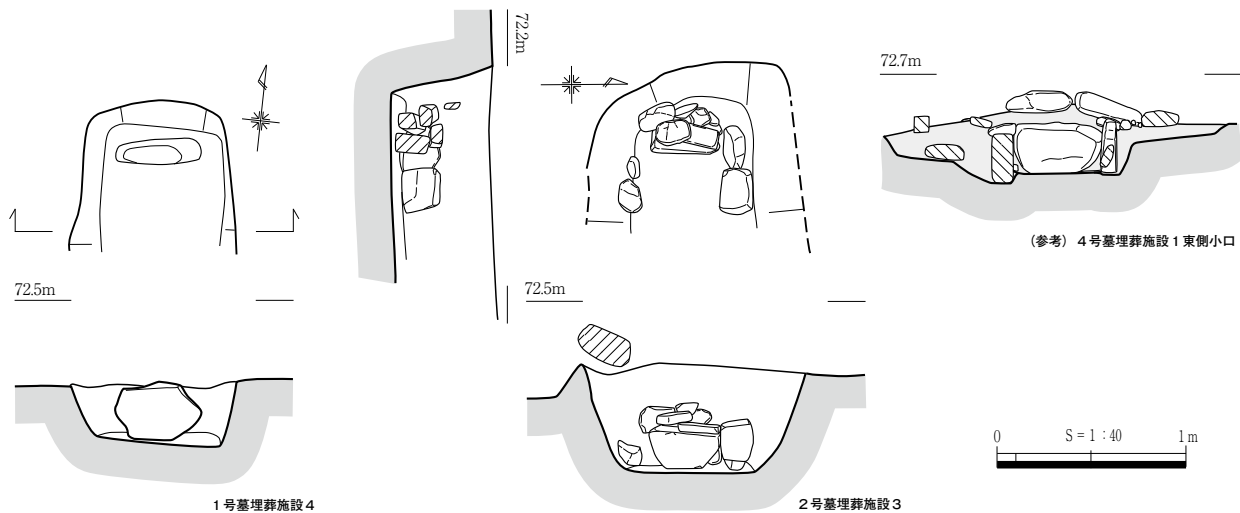
小口側に一石を立てる事例は別として、類似の手法は周辺地域において、弥生時代前期及び中期以降、木棺墓の事例において散見され、墓壙内における木棺使用を裏付ける指標の一つとなっている(守岡2007)。ただ、本墳墓群においてこの手法は非常に多用されており、その点で地域性を示す可能性

表7 弥生時代後期後葉・終末期(庄内併行期)における四隅突出型墳墓の埋葬施設数

名称	所在	区画内埋葬施設数		備考
		数	形態	
矢谷MD1号墓	広島県三次市	11	木棺8、石棺2、土壙1	
米美1号墓	鳥根県松江市	7	木棺1、土壙6	
沢下5号墓	鳥根県松江市	1	土壙1	
沢下6号墓	鳥根県松江市	3	木棺1、土壙2	
宮山IV号墓	鳥根県安来市	1	木棺1	墳裾部に土壙1
安養寺1号墓	鳥根県安来市	4	木棺2、土壙2	
大城	鳥根県隠岐郡	4	木棺1、土壙3	
父原1号墓	鳥取県伯耆町	1	石棺1	
父原2号墓	鳥取県伯耆町	2	木棺2	
藤和墳丘墓	鳥取県倉吉市	1	木棺1	
糸谷1号墓	鳥取県鳥取市	11	木棺2、土壙9	



第71図 山陰における墳墓の埋葬施設数 (池淵2007所収の図3を転載)



第72図 木棺小口側の配石状況

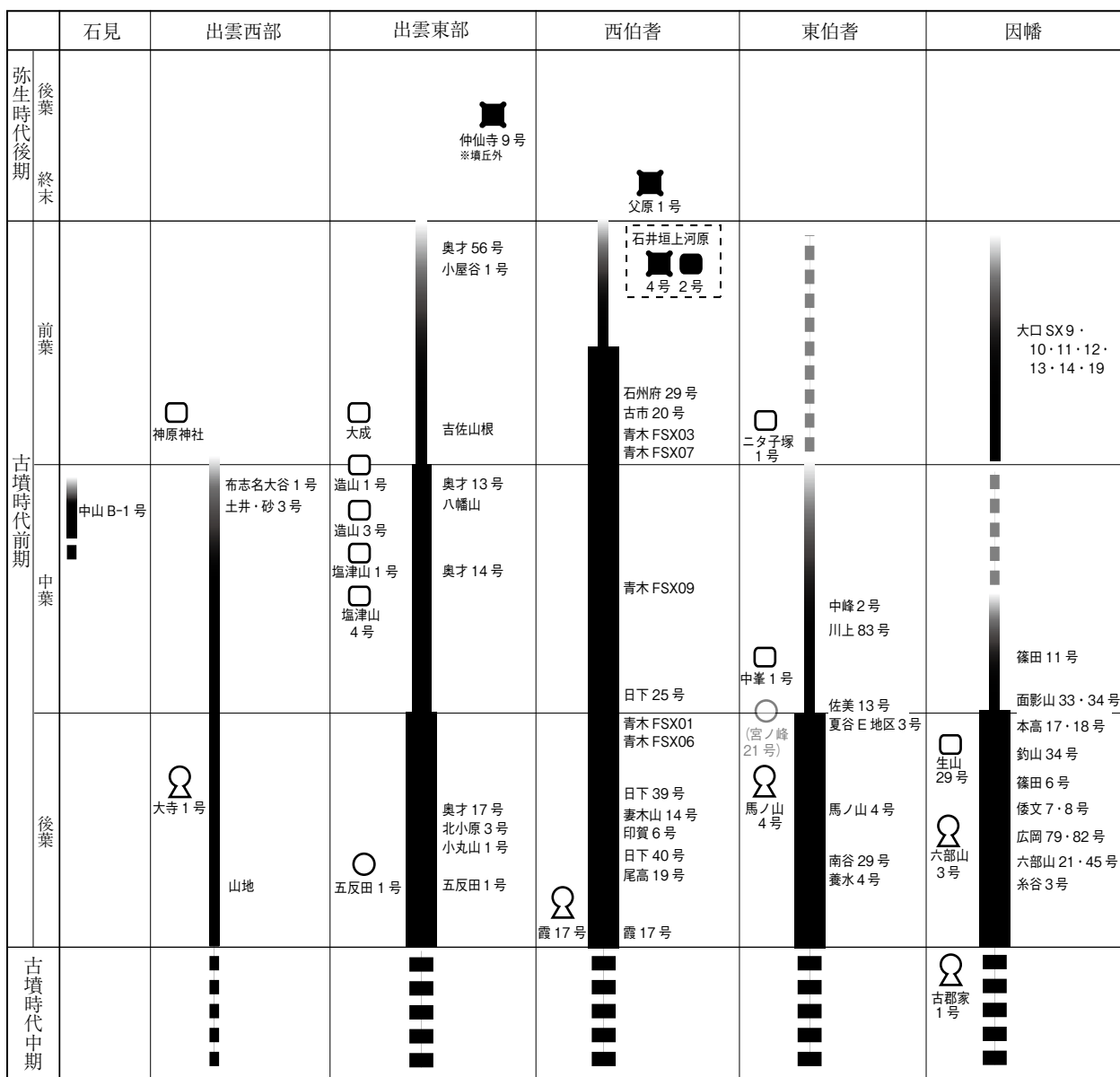
はある。

石棺 既述のとおり、2号墓埋葬施設4、4号墓埋葬施設1において箱式石棺が採用される。棺材は、貼石と同じ板状の石材を未加工で用い、それらを組み合わせて構築している。未成人埋葬が想定される2号墓埋葬施設4には蓋石が伴う。4号墓埋葬施設1は、本墳墓群においては最も大きな墓壙規模を持ち、石棺周囲に礫石、川砂を用いるなど石棺としては特異な形態を示す。

山陰地方の弥生時代墓制において石棺はほとんど認められず、木棺の採用が圧倒的である。今のところ、後期後葉に比定される安来市仲仙寺9号墓、終末期頃と目される伯耆町父原1号墓で確認されているが、単発的である。続く古墳時代前期を中心に、山陰地方における石棺を擁する墳墓を抽出し、その分布傾向を示したのが第73図である。これを見ると、古墳時代前期初頭には全ての地域に亘るものではないが、石棺採用例が各地で散見されはじめる。以後、徐々に事例が増加し、石棺が埋葬施設形態の一つとして一定の定着が窺えるのは概ね古墳時代前期後半であり^(註5)、石棺の採用は古墳時代前期以降の墓制における新しい要素と捉えられる^(註6)。ただ、定着以後も伝統的な棺形態である木棺は存続し、石棺は土器棺や竖穴系埋葬施設などと併存し墓制の一角を担う形となる。

このように山陰地方における石棺の採用から定着までの経過を概観すると、本墳墓群の石棺は初期例の一つとして位置付けられる。石棺が出現する契機については、他地域からの影響が当然ながら想定される。近隣地域に目を移すと、岡山県域では、弥生時代終末期から古墳時代前期初頭の帰属と比定される総社市殿山21号墳の第1主体部が初期例の一つとして位置付けられる(岡山県教育委員会1982、茂木1986)。その後の展開が確認できる典型的な事例として、岡山市みそのお遺跡では、弥生時代終末期頃に比定される39号墳墓で小石棺が採用されるのを端緒とするが、石棺が木棺に代わり安定して認められるのは古墳時代前期前葉及び中葉以降となる(岡山県教育委員会1993)。このように、専ら木棺を採用する墓制における石棺の採用・定着という観点では、岡山県域の様相は山陰地方と近似することが読み取れる。

一方、広島県域(安芸、備後)では早くから箱式石棺の採用が知られる。山陰地方と墓制的に近似する点の多い中国地方山間部で見ると、弥生時代中期から後期にかけての集団墓・区画墓が主体となる花園遺跡、四隅突出型の墳墓を擁する歳ノ神遺跡群(弥生後期前葉)などで顕著であり(芸備友の会1996、山陰考古学研究集会1997)、木棺と併存する。島根県側の順庵原1号墓(後期後葉)においても



(墳形)
 □ 方形 ○ 円形 ⊖ 前方後円形 ◻ 四隅突出型
 ※白抜きは堅穴系埋葬施設、黒塗りは石棺を採用する墳墓を示す。

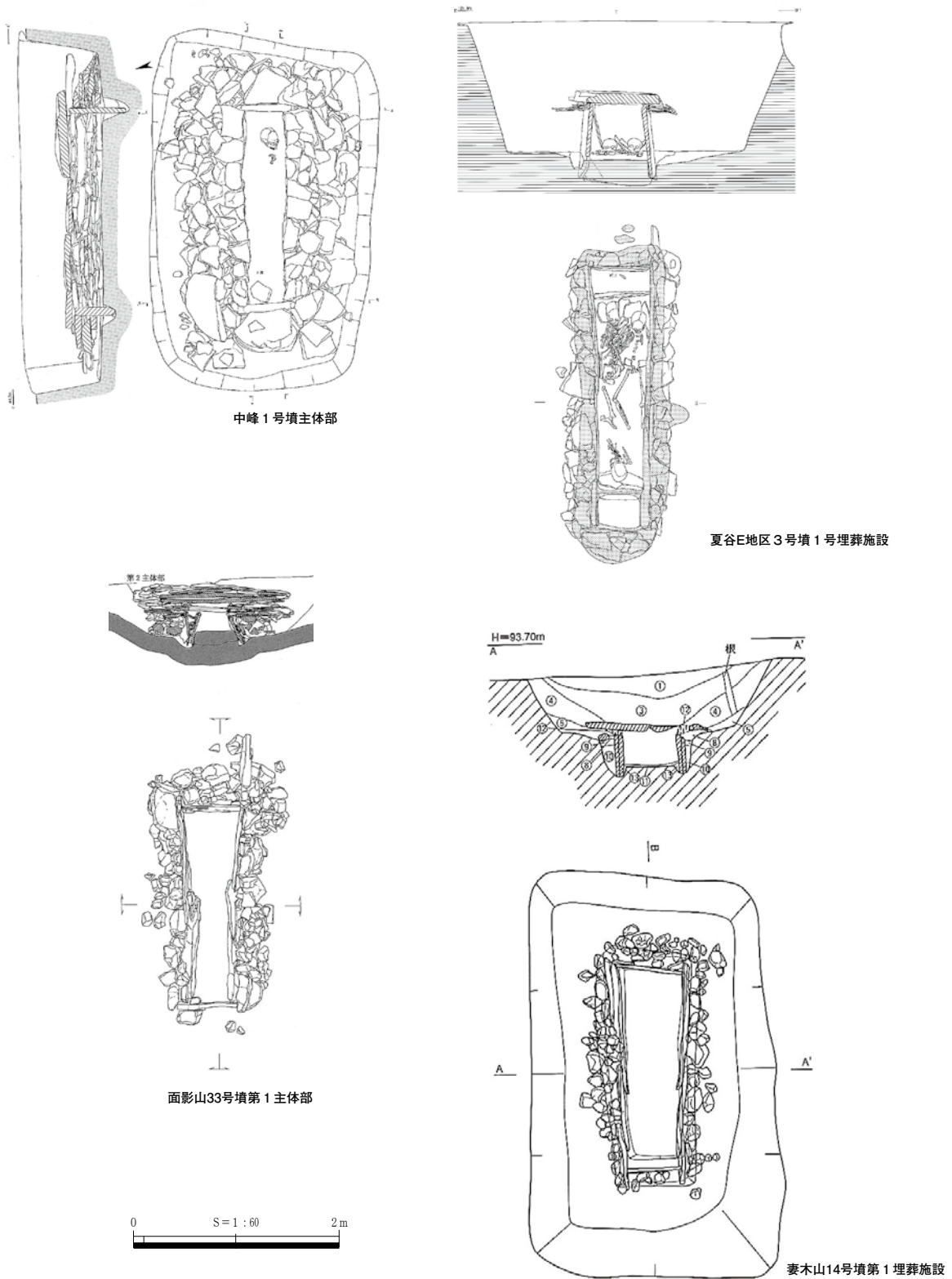
※縦軸ラインの幅は、石棺の採用度合の高低を概念的に表現したものである。
 縦軸ライン右には、石棺を採用する主要な墳墓名を示した。

第73図 山陰地方における石棺採用の概要

採用され、江の川上流域と総括される広がりをもち分布する(藤田2010)。その後の様相については調査例が少ないこともあり明確ではないが、終末期には矢谷MD1号墓の区画内埋葬において採用されている。

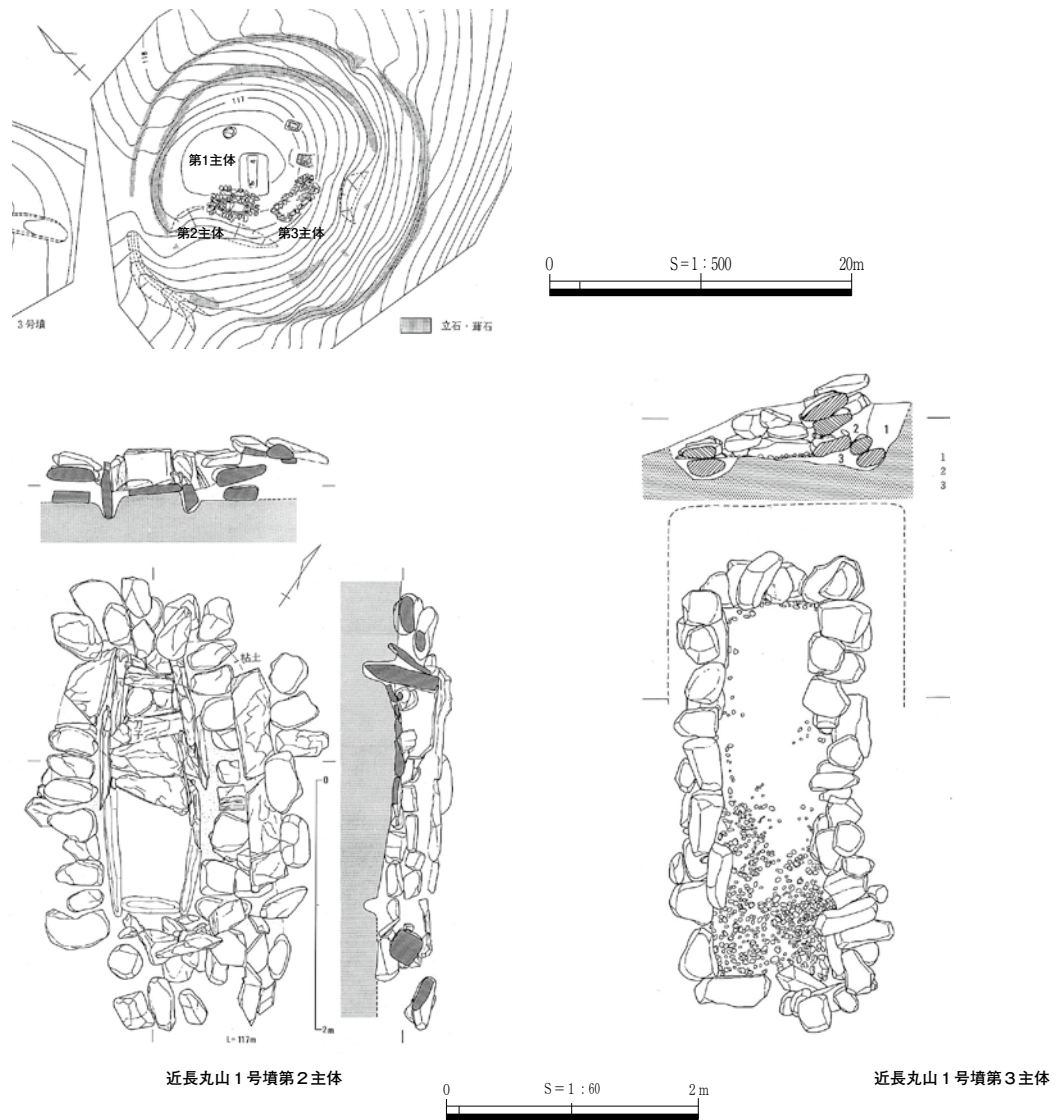
石棺を巡る近隣地域の状況を概観したが、安芸・備後といった広島県域を除き、鳥根・鳥取・岡山県域では弥生時代においてほぼ画一的に木棺主体の墓制であったことが指摘できる。このような広範囲に亘る伝統的な墓制の中で、近似した時期に石棺の採用が増加、定着していく背景を考えた場合、古くから石棺を採用する安芸・備後地域からの影響のみでは説明が困難なのは明らかである。畿内を含めた広範囲の、多面的な要素から成ることが想像される。

本項では、このような難解な課題を検討する糸口の一つとして、4号墓埋葬施設1の構造から考え



第74図 竪穴式石槨・箱式石棺の要素混在事例

てみたい。以下、その詳細を再掲する(第42・43図)。棺周辺に配される石は貼石・棺材と同じ板状の石材を用い、北側側石裏では粗雑ながら2、3段の長手積み風にし、その間隙に白灰色を呈する川砂と礫石を充填する。一方の南側側石裏では側石上面付近に一段を配するにとどまり、以下は土を充填



第75図 近長丸山1号墳

し石積みを省略する。側石裏の石積みは側石上面もしくはやや上位まで及び、そこに木蓋を伴うと想定する。この石棺の構造は、近隣で採取できる石材の特性に規制を受けた可能性は高く、このような石棺側石の裏に石を積む様相は、使用石材が板状ながら短小であることに由来する可能性は否定できない。ただ、当地域で展開する石棺の多くに、このような石棺周囲に石積みを施す事例は僅少であり、上記のような石棺周囲に施される石積みは、明確ではないが竪穴系埋葬施設の要素を含むものと積極的に評価したい。

石棺と竪穴系埋葬施設の要素が混在する例は、鳥取県内でいくつか確認できるが、その様相は多様である(第74図)。鳥取市生山29号墳は、竪穴式石室内に石棺を設置した事例と言える(山陰考古学研究集会2002・吉田2002)。倉吉市中峰1号墳の小竪穴式石室は、板石を小口積みして側壁とするが、小口側は板石一石を立てるもので、石棺的な要素が窺える事例である。鳥取市面影山33号墳第1主体部は、石棺の側石外側に板石及び角礫を用い控え積み様にするもので、詳細は不明だが上神猫山遺跡(3次調査)1号墳1号主体も同様なタイプと考えられる(吉田2002)。他には、倉吉市夏谷E地区3号墳1号埋葬施設、米子市妻木山14号墳第1埋葬施設などで見られるように、棺材周囲の上部に板石を

積むというより敷くようなタイプもある。詳細が不明な事例を含むが、これらは概ね前期後半に位置付けられ^(註7)、本項の検討では石棺採用の増加が認められる時期に概ね該当する。外観・構造的に堅穴系埋葬施設から直接的な影響を受けたことが明瞭な事例と、堅穴系埋葬施設の要素を過度に簡略化して受容したと思われる事例が並存している。現状では、このような相互の折衷度合いの違いから有意な傾向を導き出すことは難しく、時期的にやや遡る本墳墓例とは結び付き難い印象を受ける。ただ、本地域において堅穴系埋葬施設採用例が少ない中、石棺と堅穴系埋葬施設相互の影響を確認できる事例としては重要である。

山陰地方以外の事例であるが注目されるのは、岡山県津山市近長丸山1号墳である。二重に葺石が巡る径約20mの円墳で、墳丘内には木棺(割竹形木棺、中心埋葬)、堅穴式石槨、箱式石棺、土器棺など、当時の主要な埋葬施設が採用される稀有な事例である。その中で注目されるのは第2主体で、箱式石棺の周囲に板状の河原石を二段程度小口積みするもので、本遺跡例と外観的に類似する(第75図)。時期は土器棺(第6主体)等の特徴から古墳時代前期でも古相の帰属が想定されている(津山市教育委員会1992)。同墳丘内に位置する堅穴式石槨(第3主体)は河原石を用い積み方も粗雑で、導入期における地域性を示すものと推察される。出土遺物の内容、埋葬配置から中心埋葬でないことは明確であり、中心埋葬(第1主体)が木棺直葬であることも示唆的である。このような事例における第2主体の石棺は、同一墳丘内に堅穴系埋葬施設を擁することもあり、石棺周囲に石を小口積みする意図が見て取れる。その点を比較すると本墳墓例は石積みに規則性が薄いことは否めず、裏込めに近い様相を示す。ただ、程度の違いこそあれ、こうした石棺の姿は、木棺を伝統的に採用してきた地域において、石を用いる堅穴系埋葬施設が与えたインパクトの表出と捉えられるのかもしれない。石棺の採用、定着の過程は、急激な普及や増加ではなく各地域の墓制に時間差を持ちながら徐々に浸透していく印象を受ける。埋葬施設といった内部構造は、墳丘などの外部構造に比べ、新要素の導入に際し変化が少ないことが指摘されているが(君嶋2002、北・岩垣2009)、ここでは弥生時代以来、棺に専ら採用してきた「木製」に「石製」が加わっていく意識変容の過程と言い換えることもできるだろう。

山陰地方における導入期の堅穴式石槨については、出雲地域では神原神社古墳、大成古墳の前期前葉が最古期に位置付けられ、長大な石槨、舶載三角縁神獸鏡の副葬など、畿内的な要素を多分に含む(松本2002)。一方、鳥取県域では東伯耆地域の二タ子塚1号墳における小堅穴式石室が前期前葉に帰属する可能性を持ち、現状で時期がある程度明らかなものとしては古い事例となるが(第73図)、本格的な堅穴式石槨の採用は馬ノ山4号墳においてであり^(註8)、石棺の初期例とは時期的に一致しない。ただ、石棺初期例も少なく、多地域に亘るものではない。上述のように埋葬施設を受容、変化の速度が比較的鈍いことを考慮すれば、堅穴系埋葬施設そのものの採用が認められなくても、その影響が何らかの形で先行して現れることは想定できよう。

近隣地域では吉備南部や安芸において、弥生時代後期後葉から終末期にかけ、限られた階層ながら既に堅穴式石槨が採用されている(大久保2006・2007、古瀬2006)。その発信源については様々な議論が当然あり、筆者の実力不足もありここでは触れないが、古墳時代前期にかけてこのような墓制の新しい要素が広域的に波及していく中で、在地の伝統的墓制に刺激を与えた結果、4号墓埋葬施設1のような石棺が営まれた可能性をここでは提示しておきたい。

墓壙上における礫石配置 4号墓埋葬施設1における棺内東半の上層には、小円礫を主体とした礫石が多数含まれていた。堆積状況からは木蓋の腐朽による棺内への流入が窺え、墓壙上において被葬者

の足位側を中心に礫石群が配されたと推察する。礫石の出土量からみて多量に積み上げる程の量ではないが、一定量確認できる(写真52、PL.61-1・2)。こうした墓壙上の配石や集石は、弥生墳墓を中心に認められ、先学では埋葬に伴う標識的なもの、墓上における葬送儀礼後の集積といった解釈がある(大谷1995、本間2005など)。大谷晃二氏の集成及び分類(大谷1995)によれば、墓壙上の礫石集積(A・B類)は吉備を中心とした瀬戸内側に多く、出雲を中心とした山陰地域では、1、2点の礫(しばしば使用痕有り)が墓壙上の土器集積中に直立するなどして検出され(C類)、多数を占める。本遺跡例を上記分類に照らすとB類と、現状で山陰地域では少数派に該当する。今後の事例増加を待ち、より詳細な比較検討も可能となってくるであろう^(註9)。本遺跡例では礫群に破碎された土器が多数混入するなど、明確な土器集積は伴わないが、既述のとおり区画溝への転落、破損が想定される土器が数個認められ、当初は墓壙上において礫石群と共に置かれていた可能性は高い。

(6)小結

以上より、石井垣上河原遺跡における墳墓群の特徴については、以下のように要約できる。

- ① 出土土器の特徴から、古墳時代前期初頭の比較的短い期間に継続して築造されている。
- ② 墳形は1号墓・2号墓が方形、3号墓・4号墓の墳形は四隅突出型を呈する。一部先後関係は不明ながら四隅突出型から方形へ墳形が変遷した状況を示す可能性がある。
- ③ いずれの墳墓にも貼石が施されている。列石は持たない。
- ④ 埋葬施設は伝統的な木棺を主体とするが、箱式石棺の採用という墓制における新しい要素も確認できる。

墳形の変遷は見通しに過ぎず、調査事例の増加を待ち検討が必要である。本墳墓群は、土器分類上は古墳時代の枠内に入るものと考えますが、上記②～④にみる諸特徴は弥生時代墓制を明瞭に踏襲するものであり^(註10)、箱式石棺を擁する4号墓は、現状では山陰地方における四隅突出型を呈する墳墓の最終形態と評価できる。

墳墓群の被葬者像については、墳丘規模、副葬遺物が皆無であることなどから、大雑把ながら下位の首長層と考えられる。帰属時期の近いところでは、西伯耆は米子市青木遺跡F地区、日下古墳群、東伯耆は中峰古墳群、二夕子塚遺跡、因幡は大口遺跡群などにみられる小規模墳の被葬者層と重なってくるものと思われる。これらとの相互比較による地域性などの詳細な検討は、今後の課題である。

近隣の集落遺跡については、当該期の様相を窺える事例が無い。本遺跡西隣の丘陵上に位置する赤坂頭無し遺跡(本書第4章所収)は、弥生時代後期前葉、古墳時代後期前葉を主体とする集落遺跡であるが、本墳墓群と重複する時期の出土遺物及び遺構は皆無であった。鳥根県安来市荒島墳墓群を含む塩津丘陵遺跡群の検討によると、弥生時代終末期までは墳墓と集落が隣接する傾向にあるが、草田6期(布留0式併行)になると墳墓至近の集落が途絶することから、この頃に墓域と集落に一定の距離が生まれる可能性が指摘されている(池淵2006)。本墳墓群の視覚的意識は東側(甲川側)にあることは既に述べたが、同方向に広がる平野部のいずれか(樋口、八重方面)に集落が所在する可能性を現状では指摘しておきたい。

【註】

- (1) ここで言う周辺地域とは、弥生時代中期の方形貼石墓から後期における四隅突出型墳丘墓への系譜が辿れ、概ね共通の墓制が展開したと考えられる三次盆地を中心とした「中国地方山間部」、旧国名で言う出雲・伯耆・因幡の沿岸部を中心とした「山陰地方」を指す。なお、因幡地域は、終末期に糸谷1号墓があるものの基本的に四隅突出型の墳墓は展開せず、方形基調の墳墓が継続して築かれ、墓制の諸属性において但馬以東地域との親縁性がしばしば窺え(松井2006)、比較的多様な様相を呈している。ただ、確実な事例が1基とはいえ四隅突出型を呈する墳墓の分布域に含まれること、区画溝や盛土による墳丘斜面に周辺地域と同様な手法による貼石を伴う事例が一定数認められ、後期を通して展開することを重視したい。
- (2) 墳丘規模の評価については、先行研究に従い(渡邊2002、松本2003等)、墳丘の一辺が5m以下を超小型、5～15mを小型、15～30mを中型、30m以上を大型として扱う。
- (3) 本調査例は突出部の形状、構造を検討できる遺存状況にない。4突出部全てが良好に遺存し、詳細な検討を行えた事例は無いが、むしろ突出部が統一的な形状、構造を取らないことが諸例から指摘されている(渡邊2003)。
- (4) 四隅突出型の墳墓における配石構造の分類(松本2003)ではI類に該当する。列石を持たないI類は、小型、超小型の墳丘で採用されている。近年、本遺跡が所在する西伯郡大山町、東伯郡琴浦町にかけての一带、いわゆる大山北麓地域において、初めて中期に遡る方形貼石墓(梅田萱峯墳丘墓)が調査され(鳥取県埋蔵文化財センター2009)、貼石を伴う墳墓の系譜が本地域でも辿りうる可能性が高まっている。
- (5) 第73図は地域設定が大づかみであるため、細かな地域性については反映できていない。例えば、因幡地域の鳥取平野周辺において、湖山池周辺では石棺の採用は中期以降となり、千代川西岸や鳥取平野の様相(前期後半)とは異なり(大川2012)、小地域単位でみると差異が認められる。
- (6) 各地域における検討により、同様な指摘が既に為されている(陶澤2012、大川2012)。
- (7) 中峰1号墳における小竪穴式石室の帰属時期については、前期初頭から前葉に位置付ける解釈があるが(君嶋2002)、周溝から出土した完形の布留系甕の年代観、近接して営まれほぼ同時期と目される2・4号墳出土土器から前期後葉以降の帰属が指摘されている(池淵2006)。本稿ではその指摘に従う。
- (8) 倉吉市の宮ノ峰21号墳では、粘土床、割竹形木棺といった畿内的な特徴を備えた竪穴式石槨が採用され、馬ノ山4号例に先行する可能性が指摘されているが(君嶋2002)、詳細は不明である。また、21号墳は、19号墳と共に箱式石棺が検出されており、竪穴式石槨との関連や当地域における様相を検討する上で重要な事例である。
- (9) 本調査においては、墓壙に伴わないものの、石器や用途不明の円礫などが出土している。4号墓区画溝東辺出土の砥石(第48図S1)、包含層及び表土出土ながらS7～S9の磨石、円礫も標識的な用途をなした可能性があり、大谷氏の言う山陰地域で多く確認できる事例に近いものと考えられる。
- (10) 山陰地方において、前期古墳に弥生時代的な要素が濃厚に残存することは多くの指摘があり、例えば、出雲地域における前期の方墳にまみられる隅部を中心とした墳形の歪みを突出部の変容、痕跡と位置付け、当地域独自の墳丘墓から方形墳への系譜として捉える視点などである(藤田2010)。本墳墓例の場合は、変容、痕跡というよりも弥生墳墓そのものに近く、本地域の特色として提示できよう。

【参考文献】

- 池淵俊一 2006「山陰における前期古墳の様相と課題 - 出雲を中心に -」『日本考古学協会2006年度愛媛大会研究発表資料集』日本考古学協会2006年度愛媛大会実行委員会
- 池淵俊一 2007「山陰における方形区画墓の埋葬論理と集団関係」『四隅突出型墳丘墓と弥生墓制の研究』鳥根県古代文化センター・鳥根県埋蔵文化財調査センター
- 大川泰広 2012「第V章 総括 第2節 本高14号墳の歴史的評価」『本高古墳群』鳥取県文化財調査報告書21 財団法人鳥取県教育文化財団
- 大久保徹也 2006「備讃地域における前方後円墳出現期の様相」『日本考古学協会2006年度愛媛大会研究発表資料集』日本考古学協会2006年度愛媛大会実行委員会
- 大久保徹也 2007「第5章 山陰地域を取り巻く地域の弥生墳墓 第1節 中部瀬戸内における弥生墓の展開」『四隅突出型墳丘墓と弥生墓制の研究』鳥根県古代文化センター・鳥根県埋蔵文化財調査センター
- 大谷晃二 1995「第4章 考察 第3節 弥生墳丘墓における主体部上の祭祀の一形態」『矢藤治山弥生墳丘墓』矢藤治山弥生墳丘墓発掘調査団
- 岡山県教育委員会 1982『殿山遺跡 殿山古墳群』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告47

- 岡山県教育委員会 1993『みそのお遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告87
- 河合章行 2009「第5章 総括 第1節 弥生時代後期から古墳時代前期初頭の甕について」『青谷上寺地遺跡10』鳥取県埋蔵文化財センター
- 北 浩明・岩垣 命 2009「第5章 総括 第3節 鳥取平野周辺古墳群における松原古墳群の位置づけ」『松原古墳群 I』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書30
- 君嶋俊行 2002「研究報告3 因幡・伯耆における前期古墳の様相 - 葬送儀礼からみた伝統と画期 -」『第30回 山陰考古学研究集会 山陰の前期古墳』山陰考古学研究集会
- 芸備友の会 1996「特集・広島県の弥生時代墳墓」『芸備』第25集
- 山陰考古学研究集会 1997「第25回山陰考古学研究集会資料集 四隅突出型墳丘墓とその時代」
- 山陰考古学研究集会 2002「第30回山陰考古学研究集会資料集 山陰の前期古墳」
- 陶澤真梨子 2012「米子平野周辺における弥生時代後期から古墳時代中期の墳墓について」『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報2011』鳥取県教育委員会事務局 むきばんだ史跡公園
- 津山市教育委員会 1992『近長丸山古墳群』津山市埋蔵文化財発掘調査報告書第41集
- 鳥取県埋蔵文化財センター 2009『梅田萱峯遺跡V』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書28
- 福永信哉 1985「弥生時代の木棺墓と社会」『考古学研究』第32巻第1号 考古学研究会
- 藤田憲司 2010『山陰弥生墳丘墓の研究』株式会社日本出版ネットワーク
- 古瀬清秀 2006「安芸・備後における前期古墳の様相」『日本考古学協会2006年度愛媛大会研究発表資料集』日本考古学協会2006年度愛媛大会実行委員会
- 本間元樹 2005「弥生時代の墓標」『考古論集 - 川越哲志先生退官記念論文集 -』川越哲志先生退官記念事業会
- 牧本哲雄 1999「第9章 遺構、遺物の検討 第1節 古墳時代の土器について」『長瀬高浜遺跡Ⅷ・Ⅸ第6遺跡』財団法人鳥取県教育文化財団
- 松井 潔 2006「弥生時代後期の地域社会」『調査研究紀要』1 鳥取県埋蔵文化財センター
- 松本岩雄 2002「鳥根県神原神社古墳」『第25回山陰考古学研究集会資料集 山陰の前期古墳』山陰考古学研究集会
- 松本岩雄 2003「出雲の四隅突出型墓」『宮山古墳群の研究』鳥根県古代文化センター調査研究報告書16
- 茂木雅博 1986「箱式石棺考 - 岡山県下を中心として -」『山本清先生喜寿記念論集 山陰考古学の諸問題』山本清先生喜寿記念論集刊行会
- 守岡利栄 2007「山陰における弥生時代前期から中期の墓地遺跡の展開」『四隅突出型墳丘墓と弥生墓制の研究』鳥根県古代文化センター・鳥根県埋蔵文化財調査センター
- 吉田 学 2002「山陰東部の小竪穴式石室についての一考察 - 石棺系小竪穴式石室の構造を中心として -」『鳥根考古』19集
- 渡邊貞幸 2002「山陰の弥生王墓」『第5回加悦町文化財シンポジウム 弥生王墓の誕生 - 弥生社会の到達点 -』加悦町教育委員会
- 渡邊貞幸 2003「四隅突出型墳丘墓の「突出部」」『新世紀の考古学 - 大塚初重先生喜寿記念論文集 -』大塚初重先生喜寿記念論文集刊行会
- 渡邊貞幸 2007「第6章 まとめに代えて - 四隅突出型墳丘墓概説 -」『四隅突出型墳丘墓と弥生墓制の研究』鳥根県古代文化センター・鳥根県埋蔵文化財調査センター
- 渡邊 誠 2009「古墳時代開始期前後における土器編年研究～山陰地域を素材として～」『鳥根考古学会誌』第26集 鳥根考古学会

【挿図出典】

(第74図)

- 倉吉市教育委員会 1998『中峰古墳群発掘調査報告書』倉吉市文化財調査報告書第94集
- 倉吉市教育委員会 1996『夏谷遺跡発掘調査報告書』倉吉市文化財調査報告書第84集
- 財団法人鳥取市教育福祉振興会 1996『面影山古墳群発掘調査報告書 - 面影山32・33・34・35・36・83・88・97・98号墳の調査 -』
- 大山町教育委員会・大山スイス村埋蔵文化財発掘調査団 2000『妻木晩田遺跡発掘調査報告Ⅲ〈妻木新山・仙谷地区〉』大山町埋蔵文化財報告書第17集

(第75図)

- 津山市教育委員会 1992『近長丸山古墳群』津山市埋蔵文化財発掘調査報告書第41集

表8 出土土器観察表(1)

掲載 番号	取上 番号	遺構 層位 地区	挿図 PL	種類 器種	法量 (cm)	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	10・33 34・42 220・285	1号墓 南辺 区画溝埋土 2号墓 北辺 区画溝埋土 I層 C1	23 21	土師器 壺	口径 20.4 ※ 器高 16.7 △	外面：口縁部ナデ。頸部下位刺突文。 肩部波状文。 胴部ハケ、ナデ。磨耗で調整不明瞭。 内面：口縁部・頸部ナデ、ミガキ。 胴部ケズリ。 磨耗で調整不明瞭。	密	良好	内外面：橙色	
2	42・43 59・219 225	1号墓 南辺 区画溝埋土 C2	23 21	土師器 甕	口径 14.6 ※ 器高 5.6 △	外面：ナデ。 内面：口縁部・頸部ナデ、ミガキ (磨耗で不明瞭)。 胴部ケズリ。	密	良好	内外面：にぶい橙色	
3	297	2号墓 西辺 区画溝埋土 C2	32 36	土師器 壺	口径 16.3 ※ 器高 7.7 △	外面：ナデ (磨耗で不明瞭)。 内面：口縁部ナデ。頸部ナデ、指押さえ。 胴部ケズリ。磨耗で調整不明瞭。	密	良好	内外面：淡黄色	
4	278	2号墓 南西辺 区画溝埋土 C2	32 36	土師器 壺	口径 19.3 ※ 器高 7.1 △	外面：ナデ。 内面：口縁部ナデ。頸部ナデ、指押さえ。 胴部ケズリ。磨耗で調整不明瞭。	密	良好	内外面：淡黄色	
5	296・298 302・303 312	2号墓 西辺 区画溝埋土 C2	32 36	土師器 甕	口径 19.6 ※ 器高 17.1 △ 胴部最大径 24.0 ※	外面：口縁部ナデ。肩部ナデ、波状文。 胴部ハケ (磨耗で不明瞭)、ナデ。 内面：口縁部・頸部ナデ。胴部ケズリ。 磨耗で調整不明瞭。	密	良好	内外面：浅黄色～ 淡黄色	
6	280・313 314・316 318・319 343	2号墓 南西辺 区画溝埋土 C2	32 36	土師器 甕	口径 15.6 ※ 器高 17.8 △ 胴部最大径 28.6 ※	外面：口縁部ナデ。肩部 11～13 条の 平行線文、波状文。胴部ハケ・ナデ、 一部煤付着。磨耗で調整不明瞭。 内面：口縁部・頸部ナデ。 胴部ケズリ、指押さえ。 磨耗で調整不明瞭。	密	良好	内外面：にぶい黄褐色	
7	33 (H22 確認調査)	2号墓 南辺 区画溝埋土 Tr. 4 ③層	32 36	土師器 器台	器高 3.7 △	内外面：受部ナデ。	やや 密	良好	内外面：にぶい黄褐色	鳥取県埋蔵文化財セ ンター 2012 掲載分 (掲載番号：3)
8	37 (H22 確認調査)	2号墓 南辺 区画溝埋土 Tr. 4 ③層	32 36	土師器 高坏	器高 2.9 △	外面：坏部ミガキ、底部ナデ? 脚部ナデ。 磨耗で調整不明瞭。 内面：磨耗で調整不明。	密	良好	内外面：にぶい黄褐色	鳥取県埋蔵文化財セ ンター 2012 掲載分 (掲載番号：4)
9	351・353 357	3号墓 西辺 区画溝埋土 C2	38 45	土師器 壺	口径 11.9 ※ 器高 8.2 △	外面：口縁部ナデ、肩部飾描文様、波状文。 胴部ハケ。 内面：口縁部・頸部ナデ、胴部ケズリ。 全般に磨耗で調整不明瞭。	密	良好	内面：明褐色、淡黄色 外面：にぶい黄褐色、 淡赤褐色	
10	251・185 239・448 555・531	3号墓 西辺 区画溝埋土 C2	38 45	土師器 甕	口径 15.7 ※ 器高 5.1 △	外面：口縁部ナデ、ミガキ (磨耗で不明瞭)。 内面：口縁部ナデ、ミガキ (磨耗で不明瞭)。 胴部ケズリ。	密	良好	内外面：にぶい黄褐色	
11	155	4号墓 南辺 区画溝埋土 II層 E2	48 68	土師器 壺	口径 17.6 ※ 器高 8.5 △	外面：口縁部ナデ。頸部ハケ。 内面：口縁部ナデ。 頸部ナデ・指押さえ後ミガキ。 胴部ケズリ。	密	良好	内面：にぶい橙色～ 黄灰色 外面：にぶい黄褐色	
12	73・79 96～98 100・153 154・157 160・162 171～175 178 187～189 191・192 195 198～201 213～215	4号墓 南辺 区画溝埋土 II層 E2	48 66	土師器 壺	口径 18.7 ※ 器高 20.0 △	外面：口縁部ナデ。頸部ナデ、ハケ。 肩部 6～7 条の平行線文、波状文。 胴部ハケ、一部煤付着。 内面：口縁部ナデ、頸部ナデ、指押さえ。 胴部ケズリ。	密	良好	内外面：明黄褐色	
13	69・140	4号墓 西辺 区画溝埋土 II層 D2	48 68	土師器 壺	口径 19.8 ※ 器高 7.7 △	外面：口縁ナデ・波状文、ナデ、 口縁部下端の突出貼付。 内面：口縁ナデ、頸部調整不明。 磨耗で調整不明瞭。	密	良好	内外面：にぶい黄褐色	
14	430・432 433・446 460	4号墓 北辺 区画溝埋土 D2	48 68	土師器 甕	口径 15.9 ※ 器高 5.6 △	外面：口縁部・頸部ナデ (磨耗で不明瞭)。 内面：口縁部・頸部ナデ。胴部ケズリ。	密	良好	内外面：淡黄色	
15	29	4号墓 南辺 区画溝埋土 I層 E2	48 66	土師器 甕	口径 18.4 ※ 器高 12.2 △	外面：口縁部ナデ。肩部平行線文?、波状文。 胴部ハケ、ナデ。 内面：口縁部・頸部ナデ。胴部ケズリ。 全般に磨耗で調整不明瞭。	密	良好	内外面：にぶい黄褐色	
16	396 399～402 404・407	4号墓 東辺 区画溝埋土 E1	48 67	土師器 甕	口径 22.4 ※ 器高 14.75 △	外面：口縁部・頸部ナデ。胴部ナデ、ハケ。 内面：口縁部ナデ (磨耗で不明瞭)。 胴部ケズリ。	密	良	内外面：明黄褐色	
17	148	4号墓 北辺 区画溝埋土 D2	48 68	土師器 壺又は甕	器高 3.5 △	外面：ナデ。 内面：ナデ。	やや 密	やや 良好	内外面：浅黄色	
18	4・52 145・153 164・197 208・209 211	4号墓 南辺 区画溝埋土 II層 E2	48 68	土師器 甕	器高 6.7 △ 底径 5.9 ※	外面：胴部ナデ後ハケ。煤付着。 底部ナデ後ハケ。 内面：胴部・底部ケズリ、指押さえ。	密	良好	内面：灰黄色～ にぶい黄色 外面：にぶい黄色	
19	405・407 409～411	4号墓 東辺 区画溝埋土 E1	48 66・67	土師器 鼓形器台	受部径 24.3 ※ 器高 13.8 脚部径 21.0 ※	外面：ナデ。磨耗で調整不明瞭。 内面：受部ナデ、ミガキ。脚部ケズリ。 磨耗で調整不明瞭。	密	良好	内面：にぶい黄褐色 外面：浅黄色	

表9 出土土器観察表(2)

掲載番号	取上番号	遺構層位地区	挿図PL	種類器種	法量 (cm)	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
20	141	4号墓 墳丘II層 D2	48 68	土師器 鼓形器台	器高 3.6 △	外面：ナデ、ミガキ（磨耗で不明瞭）。 内面：ナデ、ミガキ。	密	良好	内面：にぶい黄橙色 外面：にぶい黄褐色 ～褐灰色	埋葬施設1周辺
21	389	4号墓 埋葬施設1 棺内埋土 D2	48 68	土師器 鼓形器台	器高 2.0 △	外面：ナデ、赤色塗彩。磨耗で不明瞭。 内面：脚部ケズリ。脚端部ケズリ後ミガキ。	密	良好	内面：にぶい黄褐色 外面：明黄褐色	
22	233	4号墓 北辺 区画溝埋土 D2	48 68	土師器 器台	器高 3.3 △	外面：ナデ。 内面：脚部ケズリ。 脚端部ケズリ後ナデ（磨耗で不明瞭）。	密	良好	内外面：淡黄色	
23	378・379 408	4号墓 東辺 区画溝埋土 D2	48 66・67	土師器 高坏	口径 27.6 ※ 器高 19.7 △ 底径 16.65 ※	外面：坏部上半ナデ・ハケ後ミガキ。 坏部下半ナデ、ハケ後放射状ミガキ。 脚部ナデ・ハケ後ミガキ、端部ココナデ。 内面：坏部ナデ・ミガキ。脚部ケズリ、 下位ナデ・ハケ。一部黒斑有。	密	良好	内面：浅黄褐色 外面：浅黄褐色 ～橙色	
24	462	4号墓 北辺 区画溝埋土 D2	48 68	土師器 高坏	器高 5.1 △	外面：ナデ後ミガキ。 内面：磨耗で調整不明。	密	良好	内面：橙色 内面：浅黄褐色～ 黄褐色	
25	235	4号墓 北辺 区画溝埋土 D2	48 68	土師器 高坏？	筒部径 3.6 器高 1.8 △	外面：ナデ（磨耗で不明瞭）。 内面：坏部？ミガキ。 脚部ケズリ後ナデ（磨耗で不明瞭）。	密	良好	内面：にぶい黄色～橙 色 外面：橙色	
26	420	4号墓 北辺 区画溝埋土 D2	48 68	土師器 低脚坏	器高 2.9 △	外面：ナデ、ハケ、ミガキ（磨耗で不明瞭）。 内面：ナデ後ミガキ（磨耗で不明瞭）。	密	良好	内外面：浅黄褐色～橙 色～黄灰色	
27	32	II層 B3	49 67	土師器 壺又は甕	器高 4.4 △	外面：ナデ、赤色塗彩（磨耗で不明瞭）。 内面：ナデ、ミガキ、赤色塗彩（磨耗で不明瞭）。	密	良好	内面：橙色 外面：にぶい黄褐色～ 橙色	
28	33	I層 C1	49 67	土師器 甕	口径 16.2 ※ 器高 5.4 △	外面：ナデ。 内面：口縁部ナデ。頸部・胴部ケズリ。	密	良好	内面：にぶい黄褐色 外面：にぶい黄褐色～ 橙色	2号墓又は3号墓関 連か
29	4・9・ 10	I層 C1・C2	49 67	土師器 壺又は甕	器高 5.0 △	外面：口縁部・頸部ナデ。 内面：口縁部・頸部ナデ。	密	良好	内面：にぶい橙色～橙 色 外面：にぶい黄色	2号墓又は3号墓関 連か
30	23	I層 D1	49 67	土師器 鼓形器台	器高 5.5 △	外面：ナデ、ミガキ（磨耗で不明瞭）。 内面：受部ナデ後ミガキ（磨耗で不明瞭）。 脚部ケズリ。	密	良好	内外面：にぶい黄褐色	3号墓又は4号墓関 連か
31	496	SK 5 埋土 B2	55 71	弥生土器 甕	口径 20.2 ※ 器高 12.4 △	外面：口縁部板状工具による平行線文 （10～11条）。一部煤付着。 頸部ナデ。肩部波状文。 胴部ハケ。一部煤付着。 内面：口縁部～頸部ナデ後ミガキ （磨耗で不明瞭）。胴部ケズリ。	密	良好	内外面：明黄褐色	
32	71・84・ 499	SK 5 埋土 B2	55 71	弥生土器 甕	口径 17.6 ※ 器高 4.5 △	外面：口縁部板状工具による平行線文（16条）。 頸部ナデ。 内面：口縁部～頸部ナデ後ミガキ。胴部ケズリ。	やや 密	良好	内面：褐灰色 外面：灰黄褐色	
33	1	I層 B1	55 71	弥生土器 壺又は甕	器高 3.7 △	外面：口縁部板状工具による平行線文（13条）。 内面：ナデ後ミガキ。	密	良好	内外面：にぶい黄褐色	SK 5に伴うと判断
34	71・84・ 89・90・ 106・496・ 513	SK 5 埋土 B2	55 71	弥生土器 壺	口径 13.4 ※ 器高 3.5 △	外面：口縁部ナデ後ミガキ（磨耗で不明瞭）。 頸部ナデ。 内面：口縁部ナデ後ミガキ。 頸部ケズリ後ミガキ。	密	良好	内面：橙色 外面：浅黄色	35と同一個体
35	84 2 (H22 確認調査)	SK 5 埋土 B2	55 71	弥生土器 壺	器高 2.4 △ 底径 4.4 ※	外面：胴部・底部ナデ後ミガキ（磨耗で不明瞭）。 内面：胴部・底部ナデ後ミガキ（磨耗で不明瞭）。	密	良好	内面：橙色 外面：浅黄色～にぶい 赤褐色	34と同一個体
36	496	SK 5 埋土 B2	55 71	弥生土器 甕	器高 9.2 △ 底径 7.5 ※	外面：ナデ・ハケ後ミガキ、一部煤付着。 内面：ケズリ。付着物有（炭化物か）。	密	良好	内面：黄褐色 外面：明黄褐色	
37	84	II層 B2	55 71	弥生土器 壺又は甕	器高 3.1 △ 底径 6.2 ※	外面：胴部ナデ後ミガキ（磨耗で不明瞭）。 底部ナデ（磨耗で不明瞭）。 内面：ケズリ。	密	良好	内外面：浅黄色	SK 5に伴うと判断
38	2・92 104・499 509 22・25・ 26 (H22 確認調査)	SK 5 埋土 I・II層 A1・B1・B2	55 71	弥生土器 鼓形器台	器高 11.5 △ 脚部径 12.5 ※	外面：受部平行沈線文（9条）、ナデ、ミガキ。 脚部ミガキ。 脚裾部ナデ、ミガキ・平行沈線文（3条）。 赤色塗彩。 内面：受部ナデ後ミガキ。赤色塗彩（磨耗で不 明瞭）。脚部ナデ。脚裾部ケズリ。	密	良好	内外面：にぶい黄褐色	
39	362・363	SK 9 埋土 E2	59 74	土師器 壺又は甕	口径 16.2 ※ 器高 4.0 △	外面：口縁部・頸部ナデ。 内面：口縁部・頸部ナデ（磨耗で不明瞭）。	密	良好	内面：浅黄褐色 外面：淡黄色	
40	185	3号墓 西辺 区画溝埋土 C2	64 77	縄文土器 深鉢	器高 3.4 △	外面：縄文（上下で原体の施文方向が異なる）。 内面：縄文。	密	良好	内面：黄褐色 外面：褐色	口縁部資料 胎土に繊維混入 早期帰属か
41	548	攪乱土 C2	64 77	縄文土器 深鉢	器高 2.9 △	外面：縄文。 内面：ナデ。	密	良好	内外面：にぶい黄褐色	口縁部資料 胎土に繊維混入
42	57	II層 D2	64 77	縄文土器 深鉢	器高 3.4 △	外面：ナデ（磨耗で不明瞭）。 内面：条痕。	密	良好	内面：灰黄褐色 外面：明黄褐色	底部資料（尖底） 胎土に繊維混入
43	534	3号墓 西辺 区画溝埋土 C2	64 77	縄文土器 深鉢	器高 4.0 △	外面：縄文。 内面：条痕。	密	良好	内外面：浅黄色	胎土に繊維混入 長山式相当か 44と同一個体の可能 性有

表10 出土土器観察表(3)

掲載番号	取上番号	遺構層位地区	挿図PL	種類器種	法量 (cm)	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
44	360	II層 C2	64 77	縄文土器 深鉢	器高 4.1 △	外面：縄文。 内面：条痕。	密	良好	内外面：浅黄色	胎土に繊維混入 長山式相当か
45	482	3号墓 埋葬施設 埋土下層 C1	64 77	縄文土器 深鉢	器高 4.6 △	外面：縄文。 内面：ナデ（磨耗で不明瞭）。	密	良好	内面：にぶい黄橙色 外面：橙色	胎土に繊維混入
46	526	不明	64 77	縄文土器 深鉢	器高 2.9 △	外面：縄文。 内面：ナデ。	密	良好	内外面：灰黄褐色	胎土に繊維混入
47	552	II層 B2	64 77	縄文土器 深鉢	器高 5.3 △	外面：条痕。 内面：ナデ。	密	良好	内外面：にぶい黄褐色	胎土に繊維混入
48	62	II層 D2	64 77	縄文土器 深鉢	器高 5.6 △	外面：条痕。 内面：ナデ、ケズリ状調整。	密	良好	内面：にぶい黄色 外面：黄褐色	胎土に繊維混入 長山式相当か
49	288	II層 C2・3	64 77	縄文土器 深鉢	器高 6.7 △	内外面：条痕。	密	良好	内面：黄褐色 外面：淡黄色	胎土に繊維混入 長山式相当か
50	16	I層 D2	64 77	縄文土器 深鉢	器高 4.1 △	外面：条痕（磨耗で不明瞭）。 内面：ナデ。	密	良好	内面：灰黄褐色 外面：にぶい黄橙色	胎土に繊維混入
51	552	II層 B2	64 77	縄文土器 深鉢？	器高 2.9 △	外面：縄文、刺突。 内面：ナデ。	密	良好	内面：にぶい黄橙色 外面：橙色	
52	25	I層 D2	67 77	土師器 小皿	口径 8.8 ※ 器高 1.5 △ 底径 5.2 ※	外面：口縁部回転ナデ。底部回転系切り。 内面：回転ナデ。	密	良好	内外面：橙色	

表11 出土石器観察表

掲載番号	取上番号	遺構層位地区	挿図PL	種類器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
S1	169	4号墓 東辺 区画溝埋土 D1	66 77	砥石	デイサイト	4	4.35	2.1	71	
S2	48	II層 C2	66 77	石鏃	黒曜石	1.9	1.2	0.3	0.24	
S3	223	2号墓 区画溝埋土 C2	66 77	石鏃未製品	黒曜石	1.8	1.6	0.5	0.895	
S4	49	II層 C2	66 77	楔形石器	黒曜石	1.7	2.8	0.8	3.089	
S5	3	I層 B2	66 77	楔形石器	黒曜石	2.75	1.6	1.6	6.156	
S6	20	I層 D2	66 77	打欠石錘	安山岩	6.1	5.75	1.6	70	全面被熱。 欠損は被熱に起因するものか。
S7	488	出土位置・層 位不明	66 77	磨石	安山岩	8.9	4.85	2.5	163	
S8	287	II層 C2・C3	66 77	磨石	安山岩	10.4	8.8	4.2	539	
S9	560	I層 C1	66 77	円礫	安山岩	10.2	8.7	5.5	670	磨石か。 墳墓埋葬施設に伴う標石の可能性も考 えられる。

表12 出土金属器観察表

掲載番号	取上番号	遺構層位地区	挿図PL	種類器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
F1	518	SK 9 埋土 E1・2	59 77	不明鉄製品	2.85	0.95	0.07	0.6	
B1	186	I層 C3	67 77	煙管	5.3	1.3	1	11.903	雁首 使用痕跡あり

【文献】

鳥取県埋蔵文化財センター 2012『下市築地ノ峯東通第3遺跡』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書43